

## 伊達三郎が楽壇に残したもの

### 千里山を愛し終生の地とする

十四回生 柿崎眞吾

文中敬称略

### はじめに

チェリスト伊達三郎<sup>さだむつ</sup>は、昭和の初期から四〇余年の間千里山に住み、大阪を中心に関西に西洋古典音楽の流れをつくられました。

独奏者として、また室内楽団、管弦楽団の首席チェロ奏者として三〇年間活躍されましたが、昭和三六年二月フェスティバルホールでの演奏中に倒れられ、その後、九年間は音楽教育に身を捧げて、昭和四五年二月生涯を終わられました。

大正期から昭和初期までは、大阪には外来の演奏家が

中央公会堂で演奏会があった外は、在阪人による演奏会はないに等しい情況でした。

今日、関西には世界に通じる独奏者を輩出し、大阪を中心に室内楽はもとより、大阪フィルハーモニー交響楽団という国際的にも一流のオーケストラを有して定期演奏会が行われているのは、チェリスト伊達三郎なかりせば、今日がなかったと、誇張なしに語ることができません。

終生千里山に住み、千里山をこよなく愛した人であったことも、千里山会員にとつて嬉しいことで、本誌で、千里山の誇りチェリスト伊達三郎を讃え懐かしみながら、ご生涯を辿ってみることにいたしました。

### 生誕から世に出るまで

伊達三郎は、明治三〇年（一八九七年）五月、伊達謙・えつ夫妻の三男として、現在の千代田区神田多町に生を受けました。今の神田駅西側の目の前あたりで、まさに、「神田の生まれ」です。

父謙は明治初期の基督教解禁後、来朝した米国バプテストの宣教師の感化を受けて伝道者を志し、現在の神田三崎町教会の前身に当たる東京第一浸禮教会の牧師でし

た。十二人の子女をもうけましたが、当時開拓時代の牧師生活は、今からは想像を超える清貧で、兄弟は宣教師のところへ順次に預けられて育ちました。

其処には、ピアノもあり、まだ日本の家庭にはない西洋音楽の家庭環境が備わっていましたので、三郎の十歳年上の兄の愛はピアノの才能に恵まれていたことから、東京音楽学校(現芸大)に進みます。演奏家を目指す本科よりも、直ぐ職に就ける年数が一年短い甲種師範科を選び、卒業して師範学校の音楽教師の道を進みます。毎年卒業演奏会のピアノ部門の代表者は本科生の独壇場でしたが、明治四四年は異例の愛が選ばれました。豊かな才能の持ち主だったのです。そして父の教会の演奏も務めました。(後年千里山で三郎と伊達トリオを組む種と良は愛の子息)

#### 東京音楽学校 チェロ科へ

三郎も宣教師の家で育ちますが、中学は、牧師の子弟は月謝免除の東京学院(現関東学院)に入ります。その頃、宣教師夫人が三郎の吹く口笛に音楽性を感じ、兄の愛に劣らない才能を認め、本格的な音楽家になることを奨めます。大正六年、三郎は東京音楽学校でチェロをやる者には、楽器を貸与し弦代を支給し月謝も不要の制度を知り、直ちにチェロ科への入学を願い出て合格します。

ると言い、最初の生徒は岩崎男爵で、三郎とは兄弟弟子になったという訳です。

#### チェロ部門代表奏者として

三郎は類まれな師に出会い、チェロの勉強に集中しました。当時東京音楽学校の学友会定期演奏会や卒業演奏会は、日本人演奏家によるものとしては音楽会の注目の的で、各部門での出演者は日本人の最高レベルの演奏者でもありました。

三郎は大正八年から大正十年卒業までは学生として、以後学友として大正十五年まで連続してチェロ部門代表奏者選ばれ出演しましたので日本に伊達三郎あり!と名を馳せるようになっていました。

#### 結婚そして千里山へ

大正十一年長崎から上京しピアノ本科生となっていた佐藤しづが、コハンスキー教授門下で研鑽を積んでいましたが、三郎との合奏の機会も増え、音楽芸術を通じて将来を誓い合うようになりました。



当時まだ日本では、チェロがピアノやヴァイオリンに比べて劣らない重要な楽器であるにも拘わらず、チェロの志望がなかったのです。二〇歳近くから始めた弦楽奏者は、職業演奏家として立つことは難しいと言われていました。

しかし三郎の努力と才能、それに加えて幸運が待っていたのです。

#### ウエルクマイスター教授のこと

生涯の恩師となったH・ウエルクマイスター教授が、第一級のチェリストであり作曲家でもあったのです。

明治四〇年にドイツから来日し、日本に作曲学を植えてきた恩人ですが、元来チェロ弾きで本格的な奏法を日本に伝えたのは同教授もって嚆矢とします。当時作曲科はなかった頃でしたから作曲といえは学校唱歌位のもの、これに伴奏を付けることを献策したのもウエルクマイスターでした。弟子にはすでにチェロから入って作曲家になっていた信時潔や山田耕筰が知られていました。

チェロの志願者がなく嘆いていたところへ三郎が願って出てきたのです。教授は民間の好楽家にもチェロを教え

大正十五年三月、しづの卒業を待って結婚します。

荻窪に新居をかまえて三郎の室内楽活動も増え、ベートベン・トリオやジュピター・クワルテットのチェロ奏者として、また独奏者としての地歩も固まりつつありました。その年の十一月、東京音楽学校卒業生と一部優れた現役の学生による関西・中京地方への出張大演奏会が企画実行され、皮切りは大阪中央公会堂で、チェロの独奏者は伊達三郎でした。姫路・京都、最終は名古屋の演奏旅行を大成功の裡に打ち上げ、帰京します。

三年後に、神田生まれが、千里山に永住することになるとは夢にも考えつかないことでした。

昭和二年の早春、長女が生まれ葉子と命名します。

#### 大阪音楽学校他から招聘を受ける

昭和四年四月、大阪音楽学校にチェロ科が創設されることになり、その基礎づくりの教授として一年間の招聘を受けました。東京に家具も置いたまま家族三人で大阪へ赴任します。

仮寓生活をするうちに次女が生まれ雅子と命名します。その頃は関西が関東と並ぶ日本の産業文化の中心でありながら、西洋古典音楽の演奏者には無限の曠野に見えるたかも知れません。

偶々、東京音楽学校同窓の河邊順子から、まだ出来て間もない千里山住宅の情報もらい、見に行つたところ気に入って千里山に居を移し、もう少し関西に留まらうという気になったのが終生の地となつたはじまりです。

引越好きの夫妻は千里山で四回居を変えています。

その頃大阪府立浪速高等学校（旧制の七年制高校で、中学に当たる尋常科四年、高等学校三年の一貫教育）から教師就任の頼みがあり、大阪音楽学校と兼務します。しづも箕面学園の教師を依頼されて引き受けます。

室内楽活動に朝比奈隆を誘つ

定職が確保されたので三郎は直ちに室内楽活動を始め、東儀哲二郎らとクワルテットを、田中幸二郎らと大阪室内楽協会づくりに入りますが、アマチュア出身の朝比奈隆を伊達三郎が協会に誘つた功績は、後年の関西楽壇にとって計り知れない大きなものとなりました。

ここで、伊達三郎を一先ず置いて、朝比奈隆の生

い立ちと楽壇入り、伊達家との関わりを語ることで、伊達の後半生と朝比奈の前半生が重なり合つて一つのものになり、昭和の関西楽壇という大きな流れに育つていくのがよく解ります。

普通音楽家を志す道と全く異なり、一般の文系の学生から、サラリーマンをしていた男を、世界が認めるマエストロ（巨匠・名指揮者）に育てたのは、音楽がメシより好きだつたことによりますが、関西という土壌と、その切つ掛けとなつた伊達とのドラマがありました。

朝比奈隆が音楽家を志すまで

朝比奈隆は鉄道省のお役人の子弟として明治四一年七月東京の牛込に生まれました。伊達の十一歳下です。

東京高校尋常科の頃

中学へは国立の東京高等学校（旧制七年制）の尋常科へ進みます。二年生の時、リベラルな校風だつたこの学校の音楽教師が、教室へ蓄音機を持ち込んでクラシックやオペラのレコードを聴かせてくれました。これが端緒となつて、当時世界一のヴァイオリニストで作曲家のF・クライスラーが来日した時、その演奏を帝劇の天井桟敷で聴いて感動し、早速音楽教師に願ひ出てヴァイオリン

の手ほどきを受けるようになりました。

しかし関東大震災で丸焼けになり、祖母が見かねて、焼け残り処分市で十六円五〇銭（今の六万円位か）のヴァイオリンを買ってくれたのでますます虜になってしまいました。先生が余程見込んだのか当時高名なヴァイオリニストで作曲家の橋本国彦につけてくれたのです。さらにその後、来日中の世界的奏者のA・モギレフスキーに師事することができたというのですから、音楽学校の生徒でもないのに、その頃から天分に恵まれていたのと、プラス強心臓の持ち主でもあつたのでしょう。

高校から大学へ

高等学校へ進んでも天衣無縫の性格と持ち前の明るさは目立っていたようで、後年ですが「奴のためなら一肌脱ごう！」と言う高校の同窓生が何人も現れます。

因みに、平成元年の朝比奈隆を囲む会食会メンバー、久保重夫、山崎高

林修三、日向方斎、伊部紫之助、平井富三郎、内田藤雄（光子の父）

中村俊賢、杉浦敏久、伊部は大フィル理事長、日向は常任理事を務めた。

旧制高校を出る時には、音楽学校へ行くまでの気持ちではなかつたようです。上手といつてもメシが食える訳ではない。昭和三年、当時京都大学法学部が黄金時代と言われたその学部へ入りました。京大には学生随一と言つ



てよい大学オーケストラがありました。指揮者には宝塚少女歌劇場のオーケストラを指揮するE・メッテルが教えに来ていたのです。朝比奈はさっそくトッパ奏者になったことは言うまでもありません。

ところで隆は三男で朝比奈は養家の姓である。実父と養父が親友の仲で、隆は生まれた時から養子でした。二人の父は鉄道屋さんで兄もその道へ入っていました。鉄道官僚である。隆も鉄道一家の一人になるには高等文官試験にパスしておかなければいけないので、卒業の前年に受けたが失敗してしまいました。

### 阪急電鉄に就職する

昭和六年(一九三一年)三月卒業、世界は前々年に始まったアメリカ発の大不況の余波がづづいていた頃で、未曾有の就職難のところを阪急電鉄へ入ることができました。本人は兄の口利きでお情けで入れてもらったと言ってますが、実力はあったと思います。

私鉄のエリート社員としてスタートしたが、先ず二年間は現場体験教育です。改札係、踏切警手、車掌、運転手など鉄道部門が終わると百貨店だ。家具売り場で、「いらっしやいませ」から始まり、お年寄りのお買い物を持ってタクシー乗り場までお連れすることもある。

その頃、メッテルと同じように京大オーケストラに時々顔を出していた伊達三郎と出会う。伊達はおそらくメッテルから聞いていたのか、音楽学校は出ていないが、独学の朝比奈に非凡なものを感じていたのではないか。

阪急を辞めている朝比奈を自分が務めている大阪音楽学校に就職の世話をしている。音楽専門学校だから一応語学でもドイツ語・イタリア語の初歩と、やさしい法律・経済などの常識的な基礎学科なら朝比奈なら務まると思っただろう。阪急の半分ぐらいの月給三〇円で雇ってもらった。当時一日一円あればメシだけは食べられた時代だ。ヴァイオリンの方は免許など要らない実力主義だから、学生に教える力は充分持っているので追々やればよいと考えた筈だ。

### 朝比奈隆 伊達三郎を語る

伊達三郎さんというチェロの有名な方が、どう思ったのか、上野の卒業生でもない私に非常に目をかけてくださったんです。室内楽団をつくるから入れと言われて、これはやっぱりちょっと感激しましたよ。当時伊達三郎といえばスターで偉い人ですからね。中略 週のうち音楽学校へ三日、大学の文学部へ三日ずつ通う生活が始

一通りの現場教育が終わって電力課に配属になった。電力会社の出先である。初めてのデスクワークに「サラリーマン」になったなあと痛感した。その頃身体の中の音楽の虫が動き出したようだ。現場が嫌だったり、デスクワークが嫌だった訳では決してない。朝比奈は終生阪急大好き人間だった。最後まで阪急時代の友人を懐かしみ大切にしながら、相手も大切にしてくれたり心配してくれたり。話が少し先に飛ぶが、指揮を始めた駆け出しの頃、岡山の田舎町の中学校で演奏したことがある。農家のSと言う阪急時代の定年になっていたお師匠さん(阪急では運転台の横に立って教えてくれた人の生涯の呼び名に出会い旧交を温めた日のこと、「お前、今でもブカブカ(オケのこと)やっとなのか?」と言って阪急を辞めたことを心配してくれた。話をもとに戻す。

### 大學へ戻り伊達三郎と出会う

朝比奈は阪急を辞めて再びメッテルの門を叩き、音楽の勉強を本格的に始めると同時に、京大の文学部哲学科に学士入学した。主任教授は美学の教授で井上靖も居た。この三年間は後に音楽解釈と演奏の上でたいへん貴重な期間となったが、実家・養家の父親も鷹揚な人達で息子を信頼していたからこそだろう。

まっていたが、会社を辞めたんだからヴァイオリンの練習は毎朝六時から欠かさず頑張っていました。プロの世界に入るまでの基本の修行はわれながら一所懸命でした。

三年がとつくに過ぎた頃、伊達さんから

「君、この頃ヴァイオリン上手くなったなあ」

と言われたんですよ。口数の少ない、あまりそういうことを言わない人が言ったんです。

「私がヴァイオリン上手くなったたら、トリオやってくださいいますか?」と言ったら、

「今でもやるよ」と言われたんですよ。吃驚しました。十三の寿司屋でした。

「いいんですか?」と言ったら「君、本当に上手くなったよ」と言われました。

専門家が見ていると基本から違ってきてますから、やってることも違ってくるんですよね。

本町の三木楽器店のビルの中に二〇〇人ぐらい入るホールがあつて、舞台もピアノ



もあるので、そこで十数年やりました。お客さんは五〇人か六〇人でしたが、大阪室内楽協会を覚えていてくれる人がいるんです。

私立で小さいながらも音楽学校があつて、小さい団体でも室内楽をやつていて、オーケストラはないけれども臨時編成で電波に乗ることもある。音楽都市としては東京が一番、それに次いで二番は大阪とは言えるが、一と二の違いは途轍もなく大きい。東京には国立の音楽学校があつてピアノ、弦楽器、声乐を、陸軍と海軍が軍楽隊を持つていて金管、木管、打楽器を、それらの卒業生を主体に一応世界になんとか通じるオーケストラを持つている。それに宮内省楽部がある。

それでも大阪は官製ならぬ小さいながらも室内楽の自主団体ができた。

伊達さんと私の二人の間では、夢のような話でも、無邪気なアカデミズムみたいなものやとりがごく当たり前だった。もつとも二人の性格は全く違つていて、私はご覧のとおりですし、伊達三郎という人は、几帳面な人で自分がチェロを弾くということだけを分として、それには努力は惜しまないけれども、それ以外には欲も野心も何もない方なんです。

なつたのも、私のような駆け出しのヴァイオリン奏者を仲間として扱い、一緒に仕事をしようと思きかけてくれた伊達さんがいたから、さもなければ現在の私はなかつたでしょう。

伊達さんは室内楽に強い意欲を持つておられ、私がヴァイオリン奏者として活動している間は一緒に室内楽曲を合奏した。そして私が指揮棒をとるようになるとオーケストラの一員として、つねに私をもち立ててくださった。形の上では伊達さんは私のあとをついてきたようにみえるが、実際は私が伊達さんに助けられたり、あるいは引つ張られたりしながら、音楽の世界に入つていった



お互いに必要だったお二人

「君がちゃんとして室内楽でもオーケストラでもやるんだつたら、僕は個人のチェロ弾きとして君の下へついていく」と上下関係が逆転してしまうんですよ。

だけど、個人としては最後まで「伊達さん」「朝比奈君」でした。うちのオーケストラに入つても、そう言つてました。だけど、

「仕事の上では君が行くところなら自分はどこへでもいく。ただし、それは君がちゃんとした真つ当なことをするということを信頼してのことだ」と。

この青年に何とかしつかりやらせれば、何かご自分の考へておられるアカデミズムみたいなものが実現できるんじゃないかと思つてくださったみたいでした。

私は一時生活も楽ではなくて、体が弱かつたし、ストープなんかありませんから、冬の一番寒い時期のふた月ぐらひは、千里山の伊達さんのお宅で居候をさせてもらったのを覚えてます。寝さしてもらつて、飯も食わしてもらつて、温かい練炭ストーブのあるところでヴァイオリンの稽古をさせてもらいましたが、伊達さんだつて豊かな生活をしていたわけじゃないから、奥様には随分にご迷惑といおうか、お世話になりましたね。

私が阪急時代に思い切つて音楽の道へ転進することに

部分が多い。

伊達さんはひと口に言つて節度のある人で、演奏家としてのワクから決してはみ出さなかつた。いい仕事をするためにはどんな苦労もいとわなないタイプで、その積極性の一例は私が満州(中国東北)に演奏旅行に行くといえは、すぐ同行されるといふことに現れてた。おそらく、私が音楽家として間違つた方向に歩いてたのなら、伊達さんは私を見放しただろう。しかし、逆の見方をすれば、伊達さんが賛成すると、自分のやつていることが間違いないとの目安になつたのだから、私には得がたい先輩だつた。

こうした関係が続いたのも伊達さんが非常に口数の少ない控え目な人、私がガラガラした性格だつたのが長続きした原因かも知れない。また知り合つた年齢が伊達さんが三六、七歳、私が二五、六歳、ちょうど二世代違つた。だから伊達さんからみれば、私は子供みたいなものだつたらう。それがよかつたのかも知れない。しづ夫人が「主人と全然性格が違うのに本当に仲良くやつているわ」と不思議がられたり、感心されたりしたものだ。

伊達さんは若い者の面倒をよくみた人だつた。(後略)

音楽評論家の吉村一夫氏もこんなことを述べている。  
伊達さんは学生時代世話になった実兄の愛さんの二兄  
純と良(バターのようです)の二君を実子のように世話し  
て、立派に世間に送りだしたり、古武士のように信条に  
殉じる人でした。(後略)

### 伊達一家が取り持つ縁

昭和十六年は朝比奈の結婚の年、日米開戦の直前である。これにも伊達家が縁結びの働きを偶然にも果たすことになる。三郎の実兄ピアノニストの愛の息子二人は、ともに東京音楽学校に通っていた。兄の純は前年卒業しピアノの研究科、弟の良はヴァイオリンの本科二年生だったが、叔父三郎の盟友の朝比奈には大きな兄貴のような格別の親近感を感じていた。昭和十五年三月の学校の卒業演奏会に朝比奈は良に案内されて一緒に聴きに行った。その時ショパンを見事に弾いたピアノ部門の演奏者、田邊町子さんを朝比奈が見初めたわけだが、町子さんは純のピアノ科の同級生だった。早速朝比奈さんの結婚の相手に町子さんをどうかと五月に銀座の喫茶店で見合いとなり、話はトントン進んで翌年結婚の運びとなった。朝比奈三三歳。結婚式の直後に大東亜戦争が勃発した。

な思ひ出の期間であった。戦争末期と戦後の混乱期の中の数々の思ひ出と、颯風の目のように起こった伊達家の中の音楽エネルギーを、自分史の断片としてご紹介することを、伊達家と読者にお許しを願いたい。

私の父は昭和十七年四月転勤のため一家で千里山から横浜に転居していました。昭和十九年二月、父は主計少尉の肩書きを持っていたため兵役が残っていて、五〇歳目前の一週間前に赤紙が来て大陸戦線へ出征しました。そのため三月千里山に引き揚げることになり、伊達家とお隣同士で住むことになったのです。私は横浜二中から茨木中の二年生に転校試験を受けて入れてもらいました。隣の少年にとっては三郎先生もしづ先生もオジサン・オバサンと呼ぶのは許されることでしたし、少し年上の二人のお姉さんは、葉子ちゃん・雅子ちゃんと呼んでいました。

オジサンは日本でも高名なチェロを弾く人で、馬場町の放送局へ、オバサンはピアノを自宅出張して教えておられ、葉子さんはグレース幼稚園(当時ちさと幼稚園)で保母と先生をしながら家事の手伝い、雅子ちゃんは勤労動員で阪急電鉄、終点の天六のホームで岩橋玲子さん

間もなく純は陸軍へ、良は海軍へと出征して行った。  
昭和十七年、朝比奈は大阪音楽学校の教授を辞めてBK管弦楽団(大阪放送管弦楽団)の専属指揮者となるとともに、伊達三郎とピアノの東貞一による大阪三重奏団を結成し本格的な室内楽活動を行う。翌十八年伊達も大阪音楽学校と浪高を退職し、BK管弦楽団の首席チェロ奏者となり、室内楽、管弦楽で朝比奈と音楽活動をともしする。

この頃から朝比奈には大陸での仕事の依頼が増え、十八年には外務省の委嘱で上海交響楽団、十九年に入って満州のハルピンと新京の交響楽団の指揮を一ヶ月務めて帰国、秋に再び渡満を要請され伊達三郎を独奏者として同行、伊達のリサイタルの伴奏は町子夫人が務めた。伊達は帰国し、朝比奈はハルピンで指揮を続ける。

北太平洋でも南太平洋でも玉碎がはじまり、戦況は敗色濃厚となってくると、軍部と政府は却って戦争の終結を考えなくなる。

### 筆者終戦前後六年間の自分史断片

伊達家の隣家に転居する

昭和十九年四月から二五年三月までの六年間は、筆者が伊達家と一つの敷地の中で隣同士の生活を送った貴重

と二人で、三番線に入ります電車は千里山行きでございませう」とアナウンスしたり、ホームの散水などしてましたが、そのうち正雀の車庫に職場が変わりました。

私は国鉄吹田工機部で、千里山線の西吹田か東吹田で降りて国鉄吹田駅の前を通り、操車場の向かいの車輛修理工場へ通っていました。廣島に原爆が落ちたその二日後に、職場でクレーンから圧搾空気のタンクを降ろし損ねて大腿部をヤラれ、一週間の自宅待機をさせられていました。

しづ先生と終戦の放送を聴く

十五日のお昼に、大事な放送があるというので、オバサンが「ウチのラジオで聴きましょう」と言われ、葉子さんが幼稚園から帰ってこられて、私と三人で聴き始めたが、サッパリ解らない。あまり良くないこと位は解ったが、そのうちオバサンが頻りに涙を流しはじめ、

「日本は負けたのよ」

と言われたので放心状態になりました。その日は暑かったが透き通るような青空で、あれ以上の開放感はずいぶんあったことありません。涙が出ないので、俺はおかしいのかな?と思いました。

オバサンは顔を合わせればどんな時でもニコツと笑っ

て優しく声を掛けてくれました。オバサンのピアノの思  
い出は、この年の寒い頃でしたが、この時代でもどこか  
で演奏会があったのか、ウエバーのピアノ小協奏曲を  
連日練習され、美しく烈しいクライマックスのところを  
何度も何度も弾いておられたのが今も忘れられません。

お決まりの敗戦後のひどい世の中でしたが、父が残し  
ていった洋楽レコードのお陰で、家にあるものから聴く  
ようになっていました。運命だ、悲愴だ、未完成だから  
はじまってカルメン、椿姫、そのうちコンチエルトぐら  
いは聴くようになっていました。伊達さんの隣り、それ  
も境のない一つ敷地内に住んでいることに誇らしいもの  
を感じました。その頃よく停電があり、伊達さんには大  
型の手回しの蓄音機がありましたので、レコードを持参  
し勝手口からノコノコ入って行って自分で回して聴いた  
ものでした。本当におおらかな家族でした。

### 三郎先生のお風呂好き

オジサンのお風呂好きとお酒好きは知られています。  
燃料不足で各家の内風呂が役に立たなくなり、お風呂屋  
には配給があったから一軒しか無かった松村湯は大繁盛  
ある時、湯船の角でオジサンと向き合っていると、半  
眼にしてゆっくり浸かっておられる。常連のフクヤンが

隣で長湯に当たってぐったり伸びてしまったのを手助け  
して家に帰したのもオジサンでした。

フクヤン<sup>12</sup> 故福山博寿（象三）さん 劇団俳優 千里山会発起人

### 三郎先生のお酒好き

☆お酒の話では稚子ちゃんのお親孝行話を聞いています。  
千二小のクラスメートで踏切を下がったところに仲良  
しの李桂出さんがいました。帰りに寄った時、一升瓶に  
牛乳いろの液体が見えるので、「これなに？」と訊いたら  
「内緒やけど濁酒・・・」と言う。家へ帰って解らない  
まま話していると、父が「稚子それ分けてもらつとい  
で・・・」と真顔で言うので次の日の帰りに寄って李さ  
んに話したら「お父ちゃんに訊いてから」と言われ、そ  
のうち「稚子ちゃんとこだけやで」と言つて一升分けて  
もらつて帰った。その夜オジサンは大喜び。

配給などとづくに止まっていたから李さんとこでは濁  
酒を密かに造っていたらしい。オジサンはそれを大事に  
飲んでいたが数日で空になった。稚子ちゃんも濁酒の運  
び人は気がひけていたから、オジサンが出掛けて行って  
もちゃんと分けてくれるようにした。これは成功談。

★もう一つオジサンのお酒好きの話、これは失敗談。

オジサンが待望していた朝比奈隆さんがハルピンから

引き揚げてきた。さつそく室内楽運動を復活させ演奏旅  
行となった。その時の受難話を紹介する。

謹厳居士の先生も酒には目がない。終戦後間もなく廣  
島へ朝比奈氏らとカルテットの演奏会のため満員列車に  
乗られた。途中座席が一緒になったヤミのかつき屋がす  
すめる安焼酎を吞まされた。廣島の駅に着いて気がつく  
と先生の靴が無い、その頃は皮靴は貴重で高価なもので  
あった。ヤミ屋が焼酎を吞ませて靴を盗んだのか、他の  
ドロ棒が盗ったのか定かでないが、何にしても会場へ行  
くために歩かねばならない。先生は朝比奈氏に楽器を持  
たせ、自分は靴下のままで電車を歩かれた。その恰好  
はあのスタイリストの先生を想像すれば何とも言えない  
オカシな姿であったろう。関響の野口幸助さんのお話。

### 三郎先生の散歩好き

次女稚子さんの思い出から。父は歩くのが好きでよく  
散歩しました。手をつなぎ風を感じ、野の花の名を教わ  
り、「どこに行くの?」「散歩だから分らないサ」この  
決まり文句を飽きずに交わし、でも子供の足には苛酷な  
距離の時もあり箕面まで行き、帰りは電車、またある時  
は千里山から天六へ向かって、長柄橋の上でとうとう泣  
きべそをかき、「うん、そうか」と即タクシーを止めて三

越へ。父はよく馬場町のBKまで歩いていました。(後略)

### 三郎先生の身だしなみ

浪高の最後の教え子13 美川州平さんが当時を回想し、  
大戦下であったし教師もろくな服装をしていなかったが  
伊達先生はキチツと体に合ったダブルボタンの服がよく  
似合い、スレ違つとブーンと整髪料のいい匂いがするの  
で学生達の間でも、よく話に出たものだ。(後略)

筆者は、オジサンは演奏家としての身だしなみの心得  
からいつもキチツとされていたと思う。冬などソフト帽  
にオーバーコート、片手にチェロを掲げるから胸を張つ  
て颯爽と歩いておられた姿は千里山の風物詩でもあった。  
辞書にスタイリスト(風貌や身なりに特に気を配る  
人)や、ダンディー(洒落男、伊達男)があります。その  
いづれでもない。整った容貌でキチツとされていたから  
そう見えたので、本人は我関せず、むしろ侍のような気  
質と気概を感じたものだ。侍のことを弓取りと言うが、  
オジサンは千里山の弓取り一筋のアーティストだった。

### 伊達トリオの誕生

その頃、戦災に遭われていた東京の伊達家の二一家が  
引越して来られて同居されることになった。実兄に当た

られるピアノスト愛さんと、亡妻の義母上、お嬢さんの玲子・和子のお二人、それにご子息お二人が続々復員してこられました。

中支から機関銃兵だったピアノストの純さん、海軍予備学生から士官になって帰って来られたヴァイオリニストの良さんと一挙に倍以上の大家族になったのです。

復員してきたお二人は、戦中のブランクを取り戻すための烈しい稽古の毎日となった。

東京音楽学校を出た職業演奏家五人（ピアノスト三人、チェリスト、ヴァイオリニスト）が一つ屋根の下で暮らす毎日である。お弟子さんも来るし、きつと稽古のスケジュールを作るのがたいへんだったと思う。

しかしオジサンにとって関西での一族による本格的なトリオの夢が一夜にしてできたようなものだ。それは復員してきたお二人の楽壇登場に絶好の機会ともなった。伊達トリオの誕生である。

演奏会の曲目には、ベートーベン、メンデルスゾーン、それにアレンスキーのピアノ三重奏曲三曲を選ばれた。

私は昼夜聞こえてくる烈しい練習の毎日は今も忘れることができない。オバサンのお弟子さんが来たときはすぐ以前の伊達家に戻ったのんびりした感じに聞こえた。

伊達トリオの演奏会は、まだ室内楽に馴染みが浅かった関西では画期的なものだった。

室内楽とはこんなにも素晴らしいものか、シンフォニーも素晴らしい。コンチェルトもソナタも素晴らしい。しかし少ない楽器が奏でる気合いのこもったアンサンブルを聴く楽しさは格別なのを覚えてもらった。

### ハレルヤ大合唱の思い出

昭和二年の暮れ、伊達家主催、伊達トリオの協賛で、ヘンデルのハレルヤコーラスの大合唱があった。歌いた人は誰でもどうぞの伊達家らしい集いであった。

数日前に一回だけ練習があり、歌詞は日本語、本番には二五く六人来られたと思う。

純さんの伴奏ではじまり、まずオバサンのピアノのお弟子さん（含OG）で女性は十分の蒲川洋子、岩橋千賀子、伊藤雅子、12歳、廣瀬美子、大小島博子の方々、そのほかに数人、男性には浪高生の学生・OBが六人加わり、テノールは林寛さんが引つ張り、バスをオジサンがチェロで下支えされた。良さんはヴァイオリンでソプラノとアルトを適宜弾かれていたと思う。我が家にも声が掛かったので、パートを棒暗記して後方で枯木も山の賑わいを務めた。

立錫の余地がないくらいエキサイティングな素晴らしい



トリオのはじまりは伊達純（右から2番目）の復員から

終戦後の夏は格別暑かった。オジサンは紐付きの猿股一枚、ヴァイオリンの良さんの稽古は二階の南西の角部屋で、窓が低かったからよく見えた。越中樺一丁の稽古姿が今も目に浮かぶ。純さんのピアノの部屋は外からは見えなかったが、凄い練習量だった。オジサンが入って合奏が聞こえてくると、さあはじまったと耳を澄まして聞き入ったものだ。

ベートーベンの大公トリオは、ピアノ三重奏曲の白眉とも言われ、華麗にして長大なこの曲には特に力を入れて聞いているのが判った。私は今もこの曲のどの楽章が聞こえてきても六〇年前に還ることができる。

しい集いで、カ一杯皆で歌った。戦後間もない頃だったから、千里山にも平和が来たのだと実感した。

六〇年前、参加したのをきつと覚えている人がおられると思う。ふと千里山会でもできたら良いなと思う。

### 関響の成立と大演奏会

大阪の戦後最初のオーケストラ演奏は、朝比奈隆の指揮で昭和二年一月九日、十五分間の「管弦楽—BKサロシ—オーケストラ」のタイトルで曲はJ・シュトラウスの「美しく青きドナウ」であった。メンバーは八〇人でBKから三〇人の外はいろいろなところから集まった人達中にはアマチュアも含まれていた。

三ヶ月経つと聴衆を相手にしたコンサートを朝日会館で開くことになったが、放送番組ではないし、メンバーはBKの専属以外の方が多いことから、地域的にも広範囲なのを理由に関西交響楽団と名乗ることになった。

これが、昭和二年四月二六・二七日、関西交響楽団第一回定期演奏会となったのである。朝比奈隆の指揮台の前はチェロの首席奏者の伊達三郎、ピアノ演奏者は伊達純、ソプラノに笹田和子、コンサートマスターは長谷川孝一でした。



## 演奏曲目

ワグネルナー 歌劇「リエンチ」序曲

〃 「ローエングリン」エルザの夢

〃 「タンホイザー」エリザベートの祈り

リスト ハンガリア幻想曲

ドヴォルザーク 交響曲第九番「新世界より」

このコンサートは戦後最もより戦前においても、関西での自主オーケストラによる本格演奏会の記念すべき最初のものとなった。

私は独奏者の純さんが、ハンガリア幻想曲を何十回となく練習されていたのが昨日のこのように響いてくる。純さんとともに忘れられない曲の一つである。

関響の第一回定期演奏会は伊達家にとって感慨深い日として残っていることだろう。その後関響時代に二二五回、大フィルになって四〇〇回に迫ろうとしている定期演奏会の幕開きとなったのであるから、在阪演奏家による管弦楽での西洋古典音楽演奏の礎石となったことは間違いないと思う。今年は一六〇年の還暦を迎えた。

当日のことを朝比奈隆はこう述べている。

夢中だったから、内容がどうだったなどは論外。またみんなの生活がこれようになるかの目算もなかったが、

力いっぱい演奏にプレーヤーたちは「きげん、大ぜいの聴衆も熱狂してくれた。

しかしメンバーの構成員は、放送局(BK)団員から宝塚の団員、独立演奏家にアマチュア奏者と、忠臣蔵の同志を集めるように一人ずつ折衝した結果の雑多な構成員だった。

大阪フィルハーモニー交響楽団の創設には、まだもうひと山越さなければならなかったのである。

.....

嵐のような伊達家の音楽エネルギーも終わりに近づいてきた。東京の伊達家の方々が順次帰京されることになったのである。

良さんは東京芸大、その後は国立音大でヴァイオリンを教えることになり、愛さんと玲子さんと子さんの声も聞かなくなつて急に淋しくなった。

純さんが三大ヴァイオリン・コンチェルトのオーケストラ部分をピアノで弾いて、辻久子さんと二人で西日本へ演奏旅行に出られることになり、直前のプラームスの練習を目の前で聴かせていただいた。十畳の洋間に聴衆？は私一人で、生涯の思い出である。

純さんも東京芸大でピアノを教えることになり、最後

に上京されると終戦前の伊達家に戻った。後に教授、名誉教授、クロイツァー記念会々々長を務められた。

私は昭和二五年四月に上京して東京の学生になった。

昭和二七年、オジサンは大阪府芸術賞を受けられて、

伊達家は円山町に移られ、千里山の伊達トリオは、幻の室内楽団となったが、残された功績は大きかった。

筆者終戦前後六年間の自分史断片 終わり

## 演奏活動一本への道

伊達三郎が同志七人でBKを飛び出し、先ず関響の核になった。大阪財界も動いてくれて資金提供があったが、楽器の購入で消えてしまい、別途収入を京都の映画三社(松竹・大映・東映)と劇映画伴奏の契約を結び、演奏会と映画の両立で運営した。ベニス映画祭でのグランプリ「羅生門」のタイトルに関響の名前が入るなどしたが、演奏の質は上がらなかった。結局、関響は映画会社との契約を守る大阪交響楽協会と、オーケストラの演奏活動に専念する従来の関西交響楽協会に分かれ、団員も一分し、昭和三五年四月二日のオール・チャイコフスキー・

プログラムを最後に解散した。

昭和三五年五月十四日、毎日ホールで、新しい大阪フィルハーモニー交響楽団の第一回定期演奏会がはじまった。伊達三郎が願っていた、台所は苦しくとも、演奏活動一本への道は、こうして遂に実現したのである。

その後定期演奏会は順調に回を重ね、伊達三郎は首席チェロ奏者として八ヶ月後の第六回の定期演奏会を終え、昭和三六年二月九日のフェスティバルホールでの特別演奏会で、客演の外山雄三指揮ベートーベン交響曲第三番「英雄」の演奏中に脳出血のために倒れ、オーケストラから身を退くことになった。

大阪フィルハーモニーの団員として、盟友の朝比奈隆とともに、僅か八ヶ月であったが、七回演奏することができて本懐を遂げられた。

今までに鍛えた体力は、人に教えるには十分なものが残っていたので、以後の九年間は、大阪音楽大学教授に戻り後進の指導に当たった。

音楽と言っても、喧嘩、軽薄、堕落を誘うものもある。

丁度五〇年前の還暦の時にこんな言葉を残しておられる。

「音楽は、悪魔の囁きであつてはならない、

神の声を伝えるものでなければならぬ」

弟子への励ましの言葉

「音楽は天使の声、初心を忘れず、

継続こそが上達の必修事」

父から受けた基督教の固い信仰を守られ、使徒的素囲気さえ感じさせたアーティストとして、安らかに召天されました。

昭和四五年二月五日、享年七三歳

しづ夫人は、伊達三郎の妻として音楽パートナーとして古風なまでによく尽くされました。二女の母として、また千里山に住みついて以来の多くの教え子に守られて、信仰をともにする夫のもとへ旅立たれました。

昭和六三年八月二十九日 享年八五歳

## おわりに

伊達三郎・しづ御夫妻の終稿にあたり、心からお二人のご冥福をお祈り申しあげます。

「先生」と呼ばれることを嫌がられ、「君には僕は何も教えてないよ」と尊称を断られました。「伊達さん」「伊達はん」がよかったようです。



大フィルの後輩首席チェロ奏者で、戦中の浪高の教え子の島雅昭さんのお話の一部をご紹介します。

伊達さんは、納得がゆくまで個人練習を重ねられてから合奏練習にのぞむという、演奏家の良心とはどういふものであるかを言葉によらず、自らの行いによつて教える、そういう人柄で、寡黙の人でしたが、寸言で核心をつくという話かたでした。(中略) 基督教による信念、名利に恬淡で迷うことも疑うこともなく一筋の道を歩かれました。それが先生の人生だったと思います。(後略)

筆者は御夫妻の芸術や人生について語る資格などもとよりありません。

十三歳から十九歳の思春期と青春期に、戦争末期と敗戦直後の日本の混沌とした時代の中で隣家で過ごし、目をかけていただいた感謝の気持ちを残したいと思いついたばかりに稿を起こした次第でした。

朝比奈隆様の沢山の文章が、なによりも全てを語っておられ、中心に据えて前後を纏めさせていただきました。筆者の自分史断片の他は、多くの方々のご協力を頂い

て繋いだままで、拙い編集を恥じるばかりです。

ご遺族や、ご協力を賜った方々にお詫び申しあげますとともに、心から厚く御礼申しあげます。

大阪フィルハーモニー交響楽団 事務局長 小野寺昭爾様  
東京芸術大学 音楽研究センター学芸員 橋本くみ子様  
日本基督教団 三崎町教会 教会事務担当 稲本 圭子様

## 引用参考図書

朝比奈隆 私の履歴書 日本経済新聞

わが回想 中公新書

木之下晃 朝比奈隆 長生きこそ最高の芸術

大阪フィルハーモニー交響楽団 創立60周年記念史

島 雅昭 竹内良治 伊達三郎先生の思い出

伊達三郎先生を偲ぶ チェロ名曲の夕べ パンフレットより

吉村一夫 伊達先生の思い出 小さい大もの

野口幸助 芸術家的芸術家

五十嵐葉子様 小川雅子様には、資料・写真

のご提供に、心から深く御礼申しあげます。

美川州平様には浪高生の情報に感謝申しあげます。